

第1回第3次教育ビジョン策定委員会 議事要旨

日 時	平成30年2月1日(木) 14:00～16:00
場 所	県議会西棟 第1会議室
出席者	<p><委員> 13名 今村 久美 委員、川瀬 憲司 委員、澤田 由香 委員、嶋崎 吉弘 委員 清水 優子 委員、下屋 浩実 委員、早川 徹 委員、藤田 昌子 委員 益子 典文 委員、松野 英子 委員、矢嶋 茂裕 委員、吉永 和加 委員 渡辺 寿之 委員 (中村 正 委員からは事前に意見を提出いただいた。)</p> <p><県> 17名 教育長、副教育長、教育次長、義務教育総括監、総合教育センター長など</p>

会議の概要	
1	開会
2	あいさつ
3	委員長、副委員長選出
4	協議事項 ○第3次岐阜県教育ビジョンの策定について ○教育を取り巻く社会経済情勢の変化について ○岐阜県教育の現状と課題について
5	閉会

意見の要旨

- 人口減少に伴い、子どもの数も減っている。高校の存続に向けてどのようなビジョンをもっているのか。島根県などは県全体でとりくんでいるが、岐阜県はどうか。
- 学校現場の先生の声をもっと聞いてみたい。
- いろいろな考え方や価値観、多様性を容認できるよう、教員も柔軟な価値観が持てるようになるとよい。
- 高校を魅力化するために、地域の資源や人材を活かし子どもたちの学びをコーディネートするカリキュラム(学びの内容)づくりに取り組んでいる。外部人材の積極的活用を考えたらどうか。
- 教育施策の体系については、「岐阜県」の教育ビジョンとして一步踏み込んだ内容を盛り込む必要がある。
- 25%程度の高校生が就職する中で県産業につながる産業教育、あるいは進学に重点

を置いたフラッグシップ校の設置など、明確な方針を打ち出したらどうか。

- 働き方改革に関わって、部活動に取り組む生徒を指導する先生にとって80時間を超えることは少なくない。好ましいことではないが、すべてが80時間という制限となると困ってしまう状況にある。部活動の在り方について慎重に議論してほしい。
- 中高一貫教育校では、入学してから6年一緒に在籍することにおいてデメリットがあると聞いたことがある。しかし、6年間じっくり取り組めるという点では、部活動を一生懸命に取り組む学校では効果的だと聞いたことがある。
- 学校行事にかける時間が多すぎるのではないか。学校行事の練習にかける時間も多し。そのような時間を見直して、勉強や運動にあてる時間にしてほしい。
- 大学受験に対応するために中高一貫教育校が増加している。生徒も現役合格を望んでいる。岐阜県の中高一貫教育の現状はどのようになっているのか。
- 大学受験に向けた何らかの対応をしないと、岐阜県の国公立大学や難関大学の合格者数はますます減ってってしまうのではないかと感じている。
- 地域の行事に参加する割合が岐阜県は高いと聞いた。第2次教育ビジョンでは地域社会人の育成を目指しており、地域の方々との関わりにより人間力が高まっているのだと感じた。
- 就職後3年以内の離職率が4割いることに驚いた。子どもたちの成長段階で、どのようなことを体験させ、何を学ばせるのか、将来を見据えてどのような力を身に付けさせたらよいのかを考えていく必要がある。子どもたちには、たくましく、自分の力で道を切り開く力を身に付けてほしい。
- 就職者数が他県に多い中で、就職後3年以内の離職率が4割いる。知識や技能は十分なのに、上司との関係がうまくいかずにやめてしまう人もいる。職場体験の機会を増やし、仕事の楽しい部分だけでなく、人間関係に対応できる能力を身に付けてほしい。
- 児童生徒の不登校者数は中学で増加して、高等学校に進学するとなぜ減少するのか。
- 不登校の原因は、学校の問題なのか家庭の問題なのか。その原因がわからなければ支援の方法もないと思う。どこまで学校が介入できるのか、どのような対策をしているのか。
- AIの時代、ロボットができることはロボットに肩代わりしてもらったとき、人間ができることは考えることである。
- 考える子どもを育てるためには、教員が考える者でなければならない。だが、現場の教員からは、「なぜそれを教えるのか」「なぜルールを守らねばならないのか」については考えない、または考える余裕がないとの声が聞こえる。学校の業務について、やるべきことが減らないのに、時間短縮だけが求められていることが問題である。

- 小学校の学力は低いが中学校は高くなっている。成長しているものでよいのではないか。成長段階でやらなければならないことがたくさんある。学力で測れない力もたくさんある。小学校では自然と触れ合ったり、人間力やコミュニケーション力を高める教育ができると思う。
- AIの時代では、表面的な学力は必要ない場面もあると思う。ある程度の考え方の基本を知っていれば、あとはAIがやってくれる。全部の知識を持つ必要はなく、問題点や大事なことに気付く力が必要なのではないか。
- 生徒の問題にせよ、働き方にせよ、現場の改革をしたいのであれば、我々が話し合うより、現場の教師に主体性を持ってその解決策を考えてもらうのが必要だと思う。我々はそこで出たアイデアを出来るだけサポート出来るよう、このビジョンに反映するべきだ。
- 仮に他の都道府県と比較して、学力テストの平均点が低かったとしても、岐阜県で育つ子どもたちが自信に満ち溢れ、「自分には夢がある」という生徒が多いのであれば、これも十分な岐阜県の教育の魅力だと思う。子どもの才能は五教科だけで測れるものではなく、色々な形があるはず。生徒ひとりひとりの興味・関心を尊重し、認めていくことが大切ではないか。
- 能力の高い低いではなく、多くの能力を持った児童生徒を伸ばし育てることが大切。すべての児童生徒にとって、複数の選択肢から選べるような環境づくりがビジョン策定で重要なことだと思う。予想が難しい社会だからこそ、いろいろな夢を持ちながら、失敗しても、常に選択肢が広がっていくような環境が子どもたちには必要だと思う。
- 特別支援学校の全県整備、高等特別支援学校の新設により、障がいのある児童生徒の学習環境が整ってきたと感じている。すばらしい施設の中で、軽度の障がいのある生徒の一般就労に期待が持てる。
- しかし、重度の障がいのある子どもも多く、学校卒業後に不安を感じている。そのような子どもたちに対する支援も施策に反映されるとよい。
- 企業は今、人手不足への対応、働き方改革、IoTやAIの活用など多くの課題を抱えている。そして今後もまた様々な課題と向き合うことになるが、企業は直面する課題を解決するために自ら積極的に学んでいこうという人材を求めている。
- 初等教育の段階で、子どもたちに学ぶことの楽しさをしっかりと認識させる取り組みを一層強化していく必要がある。「自分から進んで勉強しよう」という気持ちがある児童生徒の割合」が出ているが、「鉄は熱いうちに打て」という通り、中学生の割合を高めるのではなく小学生の割合をさらに高めていく発想が大切だと思う。